



厚生労働省 第1221号
平成30年12月21日

都道府県
保健所設置市
特別区
衛生主管部(局)長 殿

厚生労働省医薬・生活衛生局医薬品審査管理課長
(公 印 省 路)

アテゾリズマブ(遺伝子組換え)製剤の最適使用推進ガイドラ
イン(非小細胞肺癌)の一部改正について

経済財政運営と改革の基本方針2016(平成28年6月2日閣議決定)にお
いて、革新的医薬品の使用の最適化推進を図ることが盛り込まれたことを受
けて、革新的医薬品を真に必要な患者に提供するために最適使用推進ガイド
ラインを作成しています。

このうち、アテゾリズマブ(遺伝子組換え)製剤(販売名: テセントリク
点滴静注 1200mg)を非小細胞肺癌に対して使用する際の留意事項について
は、「アテゾリズマブ(遺伝子組換え)製剤の最適使用推進ガイドライン(非
小細胞肺癌)について」(平成30年4月17日付厚生労働省発 0417 第1号
厚生労働省医薬・生活衛生局医薬品審査管理課長通知)により示しています。
今後、アテゾリズマブ(遺伝子組換え)製剤について、非小細胞肺癌にお
ける用法及び用量の一部変更が承認されたことに伴い、当該留意事項を、そ
れぞれ別紙のとおり改正いたしましたので、貴管内の医療機関及び薬局に対
する周知をお願いします。なお、改正後の最適使用推進ガイドラインは、別
添参考のとおりです。

別紙

非小細胞肺癌の最適使用推進ガイドラインの改訂箇所(新旧対照表)

新		旧	
該当ページ	(下線部追記)	該当ページ	(取消線部削除)
2ページ	対象となる用法及び用量： <u>化学療法未治療の扁平上皮癌を除く切除不能な進 行・再発の非小細胞肺癌患者の場合</u> <u>カルボプラチン、パクリタキセル及びベパシズマ ブ(遺伝子組換え)との併用において、通常、成 人にはアテゾリズマブ(遺伝子組換え)として1 回1200mgを60分かけて3週間間隔で点滴静注す る。なお、初回投与の忍容性が良好であれば、2 回目以降の投与時間は30分間まで短縮できる。</u> <u>化学療法既治療の切除不能な進行・再発の非小細 胞肺癌患者の場合</u> 通常、成人にはアテゾリズマブ(遺伝子組換え) として1回1200mgを60分かけて3週間間隔で点 滴静注する。なお、初回投与の忍容性が良好であ れば、2回目以降の投与時間は30分間まで短縮で きる。	2ページ	対象となる用法及び用量： 通常、成人にはアテゾリズマブ(遺伝子組換え) として1回1200mgを60分かけて3週間間隔で点 滴静注する。なお、初回投与の忍容性が良好であ れば、2回目以降の投与時間は30分間まで短縮で きる。
3ページ	(参考) カルボプラチンの効能又は効果、用法及び用量		(参考の追加)

	効能又は効果：非小細胞肺癌 <u>用法及び用量：通常、成人にはカルボプラチンとして、1日1回 300～400mg/m²（体表面積）を投与し、少なくとも4週間休薬する。これを1クールとし、投与を繰り返す。なお、投与量は、年齢、疾患、症状により適宜増減する。</u> パクリタキセルの効能又は効果、用法及び用量 効能又は効果：非小細胞肺癌 <u>用法及び用量：通常、成人にはパクリタキセルとして、1日1回 210mg/m²（体表面積）を3時間かけて点滴静注し、少なくとも3週間休薬する。これを1クールとして、投与を繰り返す。</u> ベバシズマブ（遺伝子組換え）の効能又は効果、用法及び用量 効能又は効果：扁平上皮癌を除く切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌 <u>用法及び用量：他の抗悪性腫瘍剤との併用において、通常、成人にはベバシズマブ（遺伝子組換え）として1回 15mg/kg（体重）を点滴静脈内注射する。投与間隔は3週間以上とする。</u>		
--	---	--	--

5 ページ	臨床試験における各薬剤の用法・用量は「3. 臨床成績」の項（P5～）参照 【有効性】 ①国際共同第Ⅲ相試験（OAK 試験） （略） 最初にランダム化された 850 例（日本人 64 例を含む）の全患者集団において、本剤群でドセタキセル群と比較して全生存期間（以下、「OS」）の有意な延長が認められ（ハザード比 [95%信頼区間]：0.73 [0.62, 0.87]、$P=0.0003$ [層別 log-rank 検定]）、中央値 [95%信頼区間] は本剤群で 13.8 [11.8, 15.7] カ月、ドセタキセル群で 9.6 [8.6, 11.2] カ月であった（図 1）。 *：上皮増殖因子受容体（以下、「EGFR」）遺伝子変異陽性又は未分化リンパ腫キナーゼ（以下、「ALK」）融合遺伝子陽性の患者では、プラチナ製剤を含む化学療法に加え、それぞれ EGFR 阻害作用又は ALK 阻害作用を有する抗悪性腫瘍剤による治療歴がある患者が組み入れられた。 （図 略） 図 1 OS の Kaplan-Meier 曲線（OAK 試験）（全患者集団）	4 ページ	【有効性】 国際共同第Ⅲ相試験（OAK 試験） （略） 最初にランダム化された 850 例（日本人 64 例を含む）の全患者集団において、本剤群でドセタキセル群と比較して全生存期間の有意な延長が認められ（ハザード比 [95%信頼区間]：0.73 [0.62, 0.87]、$P=0.0003$ [層別 log-rank 検定]）、中央値 [95%信頼区間] は本剤群で 13.8 [11.8, 15.7] カ月、ドセタキセル群で 9.6 [8.6, 11.2] カ月であった（図 1）。 *：EGFR 遺伝子変異陽性又は ALK 融合遺伝子陽性の患者では、プラチナ製剤を含む化学療法に加え、それぞれ EGFR 阻害作用又は ALK 阻害作用を有する抗悪性腫瘍剤による治療歴がある患者が組み入れられた。 （図 略） 図 1 OS の Kaplan-Meier 曲線（全患者集団）
6 ページ	②国際共同第Ⅲ相試験（IMpower150 試験）		②の追加

	化学療法歴のない*¹扁平上皮癌を除く切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌患者 1,202 例（日本人 93 例を含む）を対象に、本剤 1,200mg と他の抗悪性腫瘍剤（カルボプラチン+パクリタキセル [A 群、402 例] 又はカルボプラチン+パクリタキセル+ペバシズマブ（遺伝子組換え）[B 群、400 例]）との併用投与の有効性及び安全性を、併用化学療法（カルボプラチン+パクリタキセル+ペバシズマブ（遺伝子組換え）[C 群、400 例]）と比較する第Ⅲ相試験を実施した*²。中間解析の結果、EGFR 遺伝子変異陽性又は ALK 融合遺伝子陽性の患者（157 例）を除く 1,045 例（日本人 67 例を含む）の ITT-WT 集団において、本剤併用群（B 群 359 例）で対照群（C 群 337 例）と比較して主要評価項目である OS の有意な延長が認められ（ハザード比 [95%信頼区間] : 0.780 [0.636, 0.956]、P = 0.0164、有意水準両側 0.0184 [層別 log-rank 検定]）、中央値 [95%信頼区間] は本剤併用群 B 群で 19.2 [17.0, 23.8] カ月、対照群 C 群で 14.7 [13.3, 16.9] カ月であった（2018 年 1 月 22 日データカットオフ、図 2）。なお、本薬併用群（A 群 349 例）については、対照群（C 群 337 例）に対する OS の有意な延長は認められなかった。	
--	---	--

7 ページ	*1 : EGFR 遺伝子変異陽性又は ALK 融合遺伝子陽性の患者では、それぞれ EGFR 阻害作用又は ALK 阻害作用を有する抗悪性腫瘍剤による治療歴がある患者が組み入れられた。 *2 : カルボプラチンは 6 mg・min/mL 相当量、パクリタキセルは 200mg/m²、ペバシズマブ（遺伝子組換え）は 15mg/kg を 3 週間間隔で投与した。 （図 略） 図 2 OS の Kaplan-Meier 曲線（IMpower150 試験）（ITT-WT 集団） また、日本人患者集団における ITT-WT 集団の OS の中央値 [95%信頼区間] は本剤併用群 B 群で 19.8 [14.1, 24.2] カ月、対照群 C 群で推定不能 [13.2, 推定不能] カ月、ハザード比 [95%信頼区間] : 1.311 [0.498, 3.446] であった（図 3）。 （図 略） 図 3 日本人患者集団における OS の Kaplan-Meier 曲線（IMpower150 試験）（ITT-WT 集団）		
8 ページ	（PD-L1 発現状況別の有効性及び安全性） ①国際共同第Ⅲ相試験（OAK 試験）に組み入れられた患者のうち、腫瘍組織検体において PD-L1 を	5 ページ	—(参考情報)— PD-L1 発現状況別の有効性及び安全性 国際共同第Ⅲ相試験（OAK 試験）に組み入れられ

9 ページ	発現した腫瘍細胞及び腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合（以下、「PD-L1 発現率」）に関する情報が得られた一部の患者のデータに基づき、PD-L1 発現率等別に探索的に解析を行った有効性及び安全性の結果は以下のとおりであった。 （略） 組織型及び腫瘍組織検体における PD-L1 の発現状況別の有効性は表 2 及び図 4～5 のとおりであり、扁平上皮癌の患者では、TC0 かつ IC0 群（腫瘍組織における PD-L1 を発現した腫瘍細胞及び腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合がいずれも 1%未満）において、ドセタキセル群と比較した際の効果の大きさが小さい傾向が認められた。なお、組織型及び PD-L1 の発現率によらず、本剤の安全性プロファイルは同様であった。 表 2 組織型及び腫瘍組織検体における PD-L1 の発現状況別の有効性（OAK 試験、2016 年 7 月 7 日データカットオフ） （表 略） （図 略） 図 4 扁平上皮癌患者集団における OS の Kaplan-Meier 曲線（OAK 試験）	6 ページ	た患者のうち、腫瘍組織検体において PD-L1 を発現した腫瘍細胞が占める割合（以下、「PD-L1 発現率」）に関する情報が得られた一部の患者のデータに基づき、PD-L1 発現率等別に探索的に解析を行った有効性及び安全性の結果は以下のとおりであった。 （略） 組織型及び腫瘍組織検体における PD-L1 の発現状況別の有効性は表 2 及び図 2～3 のとおりであり、扁平上皮癌の患者では、TC0 かつ IC0 群（腫瘍組織における PD-L1 を発現した腫瘍細胞及び腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合がいずれも 1%未満）において、ドセタキセル群と比較した際の効果の大きさが小さい傾向が認められた。なお、組織型及び PD-L1 の発現率によらず、本剤の安全性プロファイルは同様であった。 表 2 組織型及び腫瘍組織検体における PD-L1 の発現状況別の有効性（OAK 試験、2016 年 7 月 7 日データカットオフ） （表 略） （図 略） 図 2 扁平上皮癌患者集団における OS の
7 ページ			

10 ページ	（図 略） 図 5 扁平上皮癌患者集団における PD-L1 発現状況別の OS の Kaplan-Meier 曲線（OAK 試験）（左図：TC 1/2/3 又は IC 1/2/3 の患者集団、右図：TC0 かつ IC0 の患者集団）		Kaplan-Meier 曲線 （図 略） 図 3 扁平上皮癌患者集団における PD-L1 発現状況別の OS の Kaplan-Meier 曲線（左図：TC 1/2/3 又は IC 1/2/3 の患者集団、右図：TC0 かつ IC0 の患者集団）
10 ページ	②国際共同第Ⅲ相試験（IMpower150 試験）に組み入れられた患者のうち、PD-L1 発現率に関する情報が得られた一部の患者のデータに基づき、PD-L1 発現率等別に探索的に解析を行った有効性及び安全性の結果は以下のとおりであった。 有効性について、PD-L1 の発現状況別の有効性の結果は、表 3 のとおりであった。 なお、PD-L1 の発現状況によらず、本剤の安全性プロファイルは同様であった。 表 3 腫瘍組織検体における PD-L1 の発現状況別の有効性（OS、ITT-WT 集団）（IMpower150 試験、2018 年 1 月 22 日データカットオフ） （表 略）		（②の追加）
11 ページ	【安全性】 ①国際共同第Ⅲ相試験（OAK 試験） （略）	8 ページ	【安全性】 国際共同第Ⅲ相試験（OAK 試験） （略）

	表4 発現率が5%以上の因果関係が否定できない有害事象 (OAK試験) (安全性解析対象集団) (表 略) なお、本剤群において間質性肺疾患 10例 (1.6%)、肝機能障害 43例 (7.1%)、大腸炎・重度の下痢 5例 (0.8%)、1型糖尿病 1例 (0.2%)、甲状腺機能障害 27例 (4.4%)、副腎機能障害 1例 (0.2%)、下垂体機能障害 1例 (0.2%)、神経障害 (ギラン・バレー症候群等を含む) 11例 (1.8%)、脳炎・髄膜炎 5例 (0.8%)、infusion reaction 8例 (1.3%)、筋炎・横紋筋融解症 2例 (0.3%)、腎機能障害 (尿細管間質性腎炎等) 5例 (0.8%) 及び重度の皮膚障害 9例 (1.5%) が認められた。また、肺炎、溶血性貧血、重症筋無力症、心筋炎及び免疫性血小板減少性紫斑病は認められなかった。本副作用発現状況は関連事象 (臨床検査値異常を含む) を含む集計結果を示す。	表3 発現率が5%以上の因果関係が否定できない有害事象 (安全性解析対象集団) (表 略) なお、本剤群で間質性肺疾患は 14例 (2.3%)、肝機能障害は 67例 (11.0%)、大腸炎・重度の下痢は 2例 (0.3%)、肺炎は 1例 (0.2%)、1型糖尿病は 1例 (0.2%)、甲状腺機能障害は 34例 (5.6%)、副腎機能障害は 3例 (0.5%)、下垂体機能障害は 1例 (0.2%)、神経障害 (ギラン・バレー症候群等を含む) は 39例 (6.4%)、脳炎・髄膜炎は 5例 (0.8%)、infusion reaction は 12例 (2.0%)、筋炎・横紋筋融解症は 2例 (0.3%)、腎機能障害 (尿細管間質性腎炎等) は 12例 (2.0%)、重度の皮膚障害は 3例 (0.5%) 及び溶血性貧血は 1例 (0.2%) で認められた。また、重症筋無力症、心筋炎及び免疫性血小板減少性紫斑病は認められなかった。
11 ページ	②国際共同第Ⅲ相試験 (IMpower150試験) 有害事象は本剤併用群 B 群の 386/393 例 (98.2%)、対照群 C 群の 390/394 例 (99.0%) に認められ、治験薬との因果関係が否定できない有害事象は本剤併用群 B 群 370/393 例 (94.1%)、対照群 C 群の	(②の追加)

12 ページ	377/394 例 (95.7%) に認められた。本剤併用群 B 群において本剤との因果関係が否定できない有害事象は 286/393 例 (72.8%) に認められ、発現率が 5%以上の本剤との因果関係が否定できない有害事象は表5のとおりであった。 表5 発現率が5%以上の本剤との因果関係が否定できない有害事象 (IMpower150試験) (安全性解析対象集団) (表 略) なお、本剤併用群 B 群において間質性肺疾患 13例 (3.3%)、肝機能障害 32例 (8.1%)、大腸炎・重度の下痢 18例 (4.6%)、肺炎 3例 (0.8%)、甲状腺機能障害 60例 (15.3%)、副腎機能障害 2例 (0.5%)、下垂体機能障害 3例 (0.8%)、神経障害 (ギラン・バレー症候群等を含む) 20例 (5.1%)、脳炎・髄膜炎 1例 (0.3%)、infusion reaction 13例 (3.3%)、筋炎・横紋筋融解症 1例 (0.3%)、腎機能障害 (尿細管間質性腎炎等) 11例 (2.8%)、重度の皮膚障害 10例 (2.5%) 及び発熱性好中球減少症 11例 (2.8%) が認められた。また、1型糖尿病、重症筋無力症、心筋炎、溶血性貧血及び免疫性血小板減少性紫斑病は認められなかった。本副作用発現	
--------	---	--

13 ページ	状況は関連事象（臨床検査値異常を含む）を含む集計結果を示す。 日本人患者集団における有害事象は本剤併用群 B 群の 36/36 例(100%)、対照群 C 群の 24/24 例(100%)に認められ、治験薬との因果関係が否定できない有害事象は本剤併用群 B 群 36/36 例(100%)、対照群 C 群の 24/24 例(100%)に認められた。本剤併用群 B 群において本剤との因果関係が否定できない有害事象は 35/36 例(97.2%)に認められ、発現率が 10%以上の本剤との因果関係が否定できない有害事象は表 6 のとおりであった。 表 6 日本人患者集団において発現率が 10%以上の本剤との因果関係が否定できない有害事象 (IMpower150 試験) (安全性解析対象集団) (表 略)		
14 ページ	4. 施設について 化学療法歴のある患者に使用する場合には、承認条件として使用成績調査（全例調査）が課せられていることから、当該調査（全例調査）を適切に実施できる施設である必要がある。その上で、医薬品リスク管理計画（RMP）に基づき、本剤の医薬品安全性監視活動への協力体制がある施設であつ	9 ページ	4. 施設について 承認条件として使用成績調査（全例調査）が課せられていることから、当該調査（全例調査）を適切に実施できる施設である必要がある。その上で、本剤の投与が適切な患者を診断・特定し、本剤の投与により重篤な副作用を発現した際に対応することが必要なため、以下の①～③のすべてを満た

	て、本剤の投与が適切な患者を診断・特定し、本剤の投与により重篤な副作用を発現した際に対応することが必要なため、以下の①～③のすべてを満たす施設において使用するべきである。 (略)		す施設において使用するべきである。 (略)
15 ページ	③-3 副作用の診断や対応に関して 副作用（間質性肺疾患、肝機能障害、大腸炎・重度の下痢、肺炎、1 型糖尿病、内分泌障害（甲状腺機能障害、副腎機能障害、下垂体機能障害）、神経障害（ギラン・バレー症候群を含む）、重症筋無力症、脳炎・髄膜炎、infusion reaction、筋炎・横紋筋融解症、腎機能障害（尿細管間質性腎炎等）、重度の皮膚障害、心筋炎、溶血性貧血、免疫性血小板減少性紫斑病、発熱性好中球減少症（カルボプラチン、パクリタキセル及びベパシズマブ（遺伝子組換え）との併用投与時）等）に対して、当該施設又は近隣医療機関の専門性を有する医師と連携し（副作用の診断や対応に関して指導及び支援を受けられる条件にあること）、直ちに適切な処置ができる体制が整っていること。	10 ページ	③-3 副作用の診断や対応に関して 副作用（間質性肺疾患、肝機能障害、大腸炎・重度の下痢、肺炎、1 型糖尿病、内分泌障害（甲状腺機能障害、副腎機能障害、下垂体機能障害）、神経障害（ギラン・バレー症候群を含む）、重症筋無力症、脳炎・髄膜炎、infusion reaction、筋炎・横紋筋融解症、腎機能障害（尿細管間質性腎炎等）、重度の皮膚障害、心筋炎、溶血性貧血及び免疫性血小板減少性紫斑病等）に対して、当該施設又は近隣医療機関の専門性を有する医師と連携し（副作用の診断や対応に関して指導及び支援を受けられる条件にあること）、直ちに適切な処置ができる体制が整っていること。
16 ページ	5. 投与対象となる患者 【有効性に関する事項】 ① 本剤の単剤投与は下記の患者において有効性	11 ページ	5. 投与対象となる患者 【安全性に関する事項】 (略)

	が示されている。 ・ プラチナ製剤を含む化学療法歴を有する切除不能なⅢB期/Ⅳ期又は再発の非小細胞肺癌患者（<i>EGFR</i> 遺伝子変異又は <i>ALK</i> 融合遺伝子陽性の患者ではそれぞれ <i>EGFR</i> チロシンキナーゼ阻害剤又は <i>ALK</i> チロシンキナーゼ阻害剤の治療歴も有する患者） ② 本剤の他の抗悪性腫瘍剤との併用投与は下記の患者において有効性が示されている。 ・ カルボプラチン、パクリタキセル及びベバシズマブ（遺伝子組換え）との併用投与： 化学療法歴のない扁平上皮癌を除く切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌（ただし、<i>EGFR</i> 遺伝子変異又は <i>ALK</i> 融合遺伝子陽性の患者は除く）患者 ③ 下記に該当する非小細胞肺癌患者に対する本剤の投与及び使用方法については、本剤の有効性が確立されておらず、本剤の投与対象とならない。 ・ 術後患者に対する本剤の単独投与及び他の抗悪性腫瘍剤との併用投与	12 ページ	【有効性に関する事項】 ① プラチナ製剤を含む化学療法歴を有する切除不能なⅢB期/Ⅳ期又は再発の非小細胞肺癌（<i>EGFR</i> 遺伝子変異又は <i>ALK</i> 融合遺伝子陽性の患者では、それぞれ <i>EGFR</i> チロシンキナーゼ阻害剤又は <i>ALK</i> チロシンキナーゼ阻害剤の治療歴も有する患者）において本剤の有効性が検証されている。 ② 下記に該当する患者に対する本剤の投与及び使用方法については、本剤の有効性が確立されておらず、本剤の投与対象とならない。 ・ 化学療法未治療の患者。 ・ 術後補助化学療法。 ・ 他の抗悪性腫瘍剤との併用。 ④ 本剤は国際共同第Ⅲ相試験において、全体集団においてドセタキセル群に対して優越性が検証されている。ただし、扁平上皮癌の患者では、TC0 かつ IC0 群（腫瘍組織における PD-L1 を発現した腫瘍細胞及び腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合がいずれも 1%未満）において、ドセタ
--	--	--------	--

	・ 化学療法歴のある患者に対する本剤と他の抗悪性腫瘍剤との併用投与 ・ 化学療法歴のない扁平上皮癌患者に対する本剤の単独投与及び他の抗悪性腫瘍剤との併用投与 ・ 化学療法歴のない非扁平上皮癌患者に対する本剤の単独投与及び②で本剤の有効性が示されていない他の抗悪性腫瘍剤との併用投与 ④ 本剤は国際共同第Ⅲ相試験（OAK 試験）において、全体集団においてドセタキセル群に対して優越性が検証されている。ただし、扁平上皮癌の患者では、TC0 かつ IC0 群（腫瘍組織における PD-L1 を発現した腫瘍細胞及び腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合がいずれも 1%未満）において、ドセタキセル群と比較した際の効果の大きさが小さい傾向が認められていることから、化学療法歴のある扁平上皮癌の患者においては PD-L1 発現率も確認した上で本剤の投与可否の判断をすることが望ましい。PD-L1 発現率が TC0 かつ IC0 であることが確認された患者においては、本剤以外の治療選択肢も考慮する。		キセル群と比較した際の効果の大きさが小さい傾向が認められていることから、扁平上皮癌の患者においては PD-L1 発現率も確認した上で本剤の投与可否の判断をすることが望ましい。PD-L1 発現率が TC0 かつ IC0 であることが確認された患者においては、本剤以外の治療選択肢も考慮する。 (略)
--	---	--	--

17 ページ	(略) 【安全性に関する事項】 (略)		
19 ページ	⑤ OAK 試験では投与開始から 36 週まで、 IMpower150 試験では投与開始から 48 週までは 6 週間間隔、それ以降はいずれの試験も 9 週 間間隔で有効性の評価を行っていたことを参 考に、本剤投与中は定期的に画像検査で効果 の確認を行うこと。	14 ページ	⑤ 本剤の臨床試験において、投与開始から 36 週 までは 6 週間間隔、それ以降は 9 週間間隔で 有効性の評価を行っていたことを参考に、本 剤投与中は定期的に画像検査で効果の確認を 行うこと。

最適使用推進ガイドライン
アテゾリズマブ (遺伝子組換え)
(販売名：テセントリク点滴静注 1200 mg)
～非小細胞肺癌～

平成 30 年 4 月 (平成 30 年 12 月改訂)
厚生労働省

目次

1. はじめに	P2
2. 本剤の特徴、作用機序	P4
3. 臨床成績	P5
4. 施設について	P14
5. 投与対象となる患者	P16
6. 投与に際して留意すべき事項	P18

1. はじめに

医薬品の有効性・安全性の確保のためには、添付文書等に基づいた適正な使用が求められる。さらに、近年の科学技術の進歩により、抗体医薬品などの革新的な新規作用機序医薬品が承認される中で、これらの医薬品を真に必要な患者に提供することが喫緊の課題となっており、経済財政運営と改革の基本方針 2016(平成 28 年 6 月 2 日閣議決定)においても、革新的医薬品等の使用の最適化推進を図ることとされている。

新規作用機序医薬品は、薬理作用や安全性プロファイルが既存の医薬品と明らかに異なることがある。このため、有効性及び安全性に関する情報が十分蓄積するまでの間、当該医薬品の恩恵を強く受けることが期待される患者に対して使用するとともに、副作用が発現した際に必要な対応をとることが可能な一定の要件を満たす医療機関で使用する必要がある。

したがって、本ガイドラインでは、開発段階やこれまでに得られている医学薬学的・科学的見地に基づき、以下の医薬品の最適な使用を推進する観点から必要な要件、考え方及び留意事項を示す。

なお、本ガイドラインは、独立行政法人医薬品医療機器総合機構、公益社団法人日本臨床腫瘍学会、一般社団法人日本臨床内科医会、特定非営利活動法人日本肺癌学会及び一般社団法人日本呼吸器学会の協力のもと作成した。

対象となる医薬品：デセントリク点滴静注 1200 mg (一般名：アテゾリズマブ(遺伝子組換え)) 対象となる効能又は効果：切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌 対象となる用法及び用量：化学療法未治療の扁平上皮癌を除く切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌患者の場合 カルボプラチン、パクリタキセル及びビンブスタン(遺伝子組換え)との併用において、通常、成人にはアテゾリズマブ(遺伝子組換え)として1回1200 mgを60分かけて3週間間隔で点滴静注する。なお、初回投与の忍容性が良好であれば、2回目以降の投与時間は30分間まで短縮できる。 化学療法既治療の切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌患者の場合 通常、成人にはアテゾリズマブ(遺伝子組換え)として1回1200 mgを60分かけて3週間間隔で点滴静注する。なお、初回投与の忍容性が良好であれば、2回目以降の投与時間は30分間まで短縮できる。	製造販売業者：中外製薬株式会社
---	------------------------

(参考)

カルボプラチンの効能又は効果、用法及び用量

効能又は効果：非小細胞肺癌

用法及び用量：通常、成人にはカルボプラチンとして、1日1回300～400 mg/m²（体表面積）を投与し、少なくとも4週間休薬する。これを1クールとし、投与を繰り返す。なお、投与量は、年齢、疾患、症状により適宜増減する。

パクリタキセルの効能又は効果、用法及び用量

効能又は効果：非小細胞肺癌

用法及び用量：通常、成人にはパクリタキセルとして、1日1回210 mg/m²（体表面積）を3時間かけて点滴静注し、少なくとも3週間休薬する。これを1クールとして、投与を繰り返す。

ベシズマブ（遺伝子組換え）の効能又は効果、用法及び用量

効能又は効果：扁平上皮癌を除く切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌

用法及び用量：他の抗悪性腫瘍剤との併用において、通常、成人にはベシズマブ（遺伝子組換え）として1回15 mg/kg（体重）を点滴静脈内注射する。投与間隔は3週間以上とする。

臨床試験における各薬剤の用法・用量は「3. 臨床成績」の項（P5～）参照

2. 本剤の特徴、作用機序

デセントリク点滴静注1200 mg（一般名：アテソリズマブ（遺伝子組換え）、以下「本剤」）は、米国のGenentech, Inc.により創製されたprogrammed cell death ligand 1（以下、「PD-L1」）に対する免疫グロブリンG1（以下、「IgG1」）サブクラスのヒト化モノクローナル抗体である。

CD274（PD-L1）は、生体内において抗原提示細胞等に発現しており、活性化したりリンパ球（T細胞、B細胞及びナチュラルキラーT細胞）等に発現するCD279（以下、「PD-1」）及びCD80（B7-1）と結合し、免疫応答を負に制御すると考えられている（Immunity 2007; 27: 111-22, Int Immunol 2007; 19: 813-24）。また、PD-L1は、種々の腫瘍細胞にも発現していること（Cancer Immunol Immunother 2007; 56: 739-45）が報告されており、PD-L1とPD-1を介した経路は、腫瘍細胞が抗原特異的なT細胞からの攻撃等を回避する機序の一つとして考えられている。

本剤は、PD-L1の細胞外領域に結合し、PD-L1とPD-1との結合を阻害すること等により、がん抗原特異的なT細胞の細胞傷害活性を増強し、腫瘍の増殖を抑制すると考えられている。

これらの知見から、本剤は悪性腫瘍に対する新たな治療薬になり得るものと期待され、非小細胞肺癌患者を対象とした臨床試験を実施し、有効性、安全性及び忍容性が確認された。

本剤の作用機序に基づく過度の免疫反応による副作用等があらわれ、重篤又は死亡に至る可能性がある。本剤の投与中及び投与後には、患者の観察を十分に行い、異常が認められた場合には、発現した事象に応じた専門的な知識と経験を持つ医師と連携して適切な鑑別診断を行い、過度の免疫反応による副作用が疑われる場合には、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行う必要がある。

3. 臨床成績
切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌の承認時に評価を行った主な臨床試験の成績を示す。

【有効性】

①国際共同第III相試験 (OAK試験)
プラチナ製剤を含む化学療法歴のある切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌患者1,225例(本剤群613例、ドセタキセル群612例)を対象に、本剤とドセタキセル(DOC)の有効性及び安全性を比較する第III相試験を実施した。本剤1,200 mg/body又はドセタキセル75 mg/m²を3週間間隔で点滴静注した。

最初にランダム化された850例(日本人64例を含む)の全患者集団において、本剤群でドセタキセル群と比較して全生存期間(以下、「OS」)の有意な延長が認められ(ハザード比 [95%信頼区間]: 0.73 [0.62, 0.87]、 $P=0.0003$ [層別 log-rank 検定]、中央値 [95%信頼区間] は本剤群で13.8 [11.8, 15.7] カ月、ドセタキセル群で9.6 [8.6, 11.2] カ月であった(図1)。

*1: 上皮増殖因子受容体(以下、「EGFR」)遺伝子変異陽性又は未分化リンパ腫キナーゼ(以下、「ALK」)融合遺伝子陽性の患者では、プラチナ製剤を含む化学療法に加え、それぞれ EGFR 阻害作用又は ALK 阻害作用を有する抗悪性腫瘍剤による治療歴がある患者が組み入れられた。

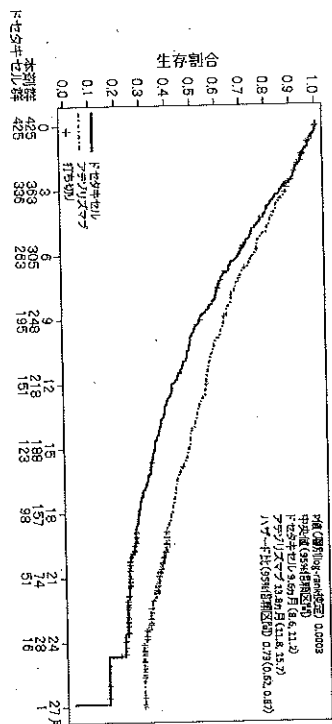


図1 OSのKaplan-Meier曲線 (OAK試験) (全患者集団)

②国際共同第III相試験 (IMpower150試験)

化学療法歴のない*1扁平上皮癌を除く切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌患者1,202例(日本人93例を含む)*2を対象に、本剤1,200 mgと他の抗悪性腫瘍剤(カルボプラチン+パクリタキセル [A群、402例]又はカルボプラチン+パクリタキセル+ベシズマブ (遺伝子組換え) [B群、400例])との併用投与の有効性及び安全性を、併用化学療法(カルボプラチン+パクリタキセル+ベシズマブ(遺伝子組換え)) [C群、400例])と比較する第III相試験を実施した*3。中間解析の結果、EGFR遺伝子変異陽性又はALK融合遺伝子陽性の患者(157例)を除く1,045例(日本人67例を含む)のITT-WT集団において、本剤併用群(B群359例)で対照群(C群337例)と比較して主要評価項目であるOSの有意な延長が認められ(ハザード比 [95%信頼区間]: 0.780 [0.636, 0.956]、 $P=0.0164$ 、有意水準両側0.0184 [層別 log-rank 検定]、中央値 [95%信頼区間] は本剤併用群B群で19.2 [17.0, 23.8] カ月、対照群C群で14.7 [13.3, 16.0] カ月であった(2018年1月22日データカットオフ、図2)。なお、本薬併用群(A群349例)については、対照群(C群337例)に対するOSの有意な延長は認められなかった。

*1: EGFR遺伝子変異陽性又はALK融合遺伝子陽性の患者では、それぞれ EGFR 阻害作用又は ALK 阻害作用を有する抗悪性腫瘍剤による治療歴がある患者が組み入れられた。

*2: カルボプラチンは6 mg・min/mL相当量、パクリタキセルは200 mg/m²、ベシズマブ(遺伝子組換え)は15 mg/kgを3週間間隔で投与した。

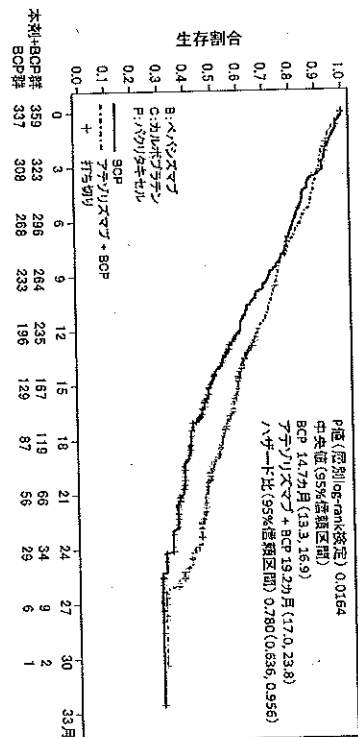


図2 OSのKaplan-Meier曲線 (IMpower150試験) (ITT-WT集団)

生存割合

0.0 0.1 0.2 0.3 0.4 0.5 0.6 0.7 0.8 0.9 1.0

0 3 6 9 12 15 18 21 24 27 30月

本種BOP種 32 29 14 14 13 12 22 19 13 8 5 4 1

BOP種 14 14 13 12 22 19 13 8 5 4 1

BOP

アサギシズメ + BOP

アサギシズメ

打ち切り

本種 (飼育49%・移送2%) 0.5723

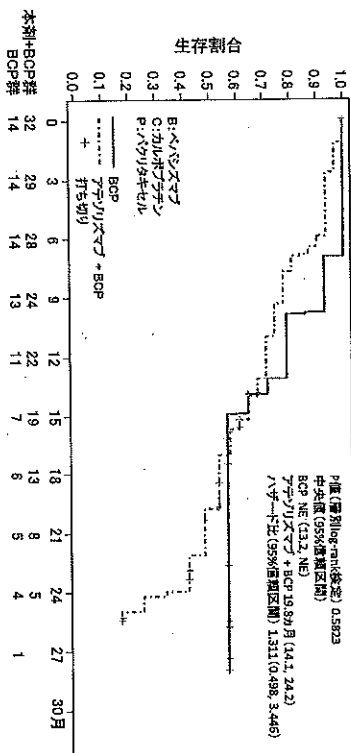
中央種 (55%・移送区間) 0.4225

BOP (42%) 0.4225

アサギシズメ BOP 15.8月 (14.1, 24.2)

アサギシズメ (55%・移送区間) 1.311 (0.498, 3.446)

図3 日本人患者集団におけるOSのKaplan-Meier曲線(IMpower150試験)
(ITT-WT集団)



① 国際共同第Ⅲ相試験 (OAK試験) に組み入れられた患者のうち、腫瘍組織検体においてPD-L1を発現した腫瘍細胞及び腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合 (以下、「PD-L1発現率」) に関する情報が得られた一部の患者のデータに基づき、PD-L1発現率等別に探索的に解析を行った有効性及び安全性の結果は以下のとおりであった。

表1 腫瘍組織検体におけるPD-L1の発現状況別の有効性
(OAK試験、2016年7月7日データカットオフ)

PD-L1 (注1)	投与群	例数	中央値	OS	交互作用の p 値
			[95%CI] (ヵ月)	ハザード比* [95%CI]	
TC 0 かつ IC 0	本薬	180	12.6 [9.6, 15.2]	0.78 [0.61, 1.01]	0.8454
	DOC	199	8.9 [7.7, 11.5]		
	本薬	241	15.7 [12.6, 18.0]	0.74 [0.58, 0.95]	
TC 1/2/3 又は IC 1/2/3	DOC	222	10.3 [8.8, 12.0]		0.4479
	本薬	290	12.7 [10.0, 15.0]	0.79 [0.64, 0.96]	
	DOC	284	9.2 [8.2, 11.1]		
TC 0/1 かつ IC 0/1	DOC	136	10.8 [8.8, 12.7]		0.0031
	本薬	129	16.5 [13.3, 20.1]	0.67 [0.49, 0.92]	
	DOC	348	12.6 [10.2, 14.2]	0.83 [0.69, 1.00]	
TC 0/1/2 かつ IC 0/1/2	DOC	356	9.8 [8.6, 11.8]		0.0031
	本薬	72	20.5 [17.5, NE]	0.43 [0.27, 0.69]	
	DOC	65	8.9 [5.6, 11.6]		
TC 3 又は IC 3	DOC	72	20.5 [17.5, NE]		0.0031
	本薬	72	20.5 [17.5, NE]	0.43 [0.27, 0.69]	
	DOC	65	8.9 [5.6, 11.6]		

DOC: ドセタキセル、*: PD-L1 発現 (TC 0, IC 1, IC 2, IC 3)、前治療のレジメン数 (1, 2) 及び組織型 (扁平上皮癌、非扁平上皮癌) を層別因子とした層別 Cox 回帰

IC：腫瘍組織におけるPD-L1を発現した腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合
OAK試験、IMpower150試験で使ったTC0~3、IC0~3は下表参照

PD-L1発現
レベル

TC0	PD1による樹皮反皮が樹皮細胞の1%未満に認められる 又は、染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が樹皮細胞の1%以上5%未満に認められる
TC1	染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が樹皮細胞の1%以上5%未満に認められる
TC2	染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が樹皮細胞の1%以上50%未満に認められる
TC3	染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が樹皮細胞の50%以上に認められる
TC4	PD1の樹皮反皮が認められない
TC5	又は、染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が重層表皮細胞の1%未満に認められる
TC6	染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が重層表皮細胞の1%以上5%未満に認められる
TC7	染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が重層表皮細胞の1%以上50%未満に認められる
TC8	染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が重層表皮細胞の50%以上に認められる
TC9	PD1の樹皮反皮が認められない
TC10	又は、染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が重層表皮細胞の1%未満に認められる
TC11	染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が重層表皮細胞の1%以上5%未満に認められる
TC12	染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が重層表皮細胞の1%以上50%未満に認められる
TC13	染色強度に関係なく、PD1による樹皮反皮が重層表皮細胞の50%以上に認められる

組織型及び腫瘍組織検体におけるPD-L1の発現状況別の有効性は表2及び図4～5のとおりであり、扁平上皮癌の患者では、TC0かつIC0群（腫瘍組織におけるPD-L1を発現した腫瘍細胞及び腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合がいずれも1%未満）において、ボセタキセル群と比較した際の効果の大きさが小さい傾向が認められた。なお、組織型及びPD-L1の発現率によらず、本剤の安全性プロファイルは同様であった。

表2 組織型及び腫瘍組織検体におけるPD-L1の発現状況別の有効性
(OAK試験, 2016年7月7日データカットオフ)

PD-L1 (検1)	投与群	例数	中央値 [95%CI] (カ月)	OS ハザード比* [95%CI]	交互作用の p値
非扁平上皮癌	TC0かつIC0	140	14.0 [10.1, 18.9]	0.75 [0.57, 1.00]	0.8364
	DOC	150	11.2 [8.6, 13.5]		
	TC1/2/3又はIC1/2/3	171	17.6 [14.2, 20.4]	0.72 [0.55, 0.95]	0.2447
	DOC	162	11.3 [9.3, 13.0]		
	TC0/1かつIC0/1	221	14.1 [11.7, 16.3]	0.79 [0.62, 1.00]	0.0017
	DOC	212	11.3 [8.9, 13.5]		
	TC2/3又はIC2/3	99	18.7 [15.5, NE]	0.61 [0.42, 0.88]	0.4902
	DOC	99	11.3 [8.8, 13.0]		
	TC0/1/2かつIC0/1/2	262	14.2 [12.1, 16.1]	0.83 [0.67, 1.03]	0.0017
	DOC	265	11.9 [9.8, 13.9]		
扁平上皮癌	TC3又はIC3	49	22.5 [18.0, NE]	0.35 [0.21, 0.61]	0.7207
	DOC	47	8.7 [4.7, 11.3]		
	TC0かつIC0	40	7.6 [4.4, 12.9]	0.82 [0.51, 1.32]	0.9299
	DOC	49	7.1 [6.0, 8.6]		
	TC1/2/3又はIC1/2/3	70	9.9 [7.6, 15.5]	0.71 [0.48, 1.06]	0.4902
	DOC	60	8.7 [6.2, 10.9]		
	TC0/1かつIC0/1	69	7.8 [6.7, 11.2]	0.76 [0.52, 1.11]	0.4902
	DOC	72	7.3 [6.3, 8.6]		
	TC2/3又はIC2/3	40	10.4 [7.6, 17.5]	0.76 [0.45, 1.29]	0.4902
	DOC	37	9.7 [5.6, 17.2]		
TC0/1/2かつIC0/1/2	TC0/1/2かつIC0/1/2	86	7.8 [6.9, 10.6]	0.79 [0.57, 1.11]	0.4902
	DOC	91	7.5 [6.3, 8.7]		
	TC3又はIC3	23	17.5 [7.9, 23.3]	0.57 [0.27, 1.20]	0.4902
	DOC	18	11.6 [5.6, 16.5]		
	ボセタキセル*				

DOC: ボセタキセル, *: 非腫瘍組織検体

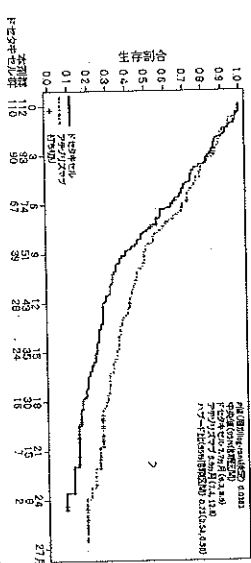


図4 扁平上皮癌患者集団におけるOSのKaplan-Meier曲線 (OAK試験)

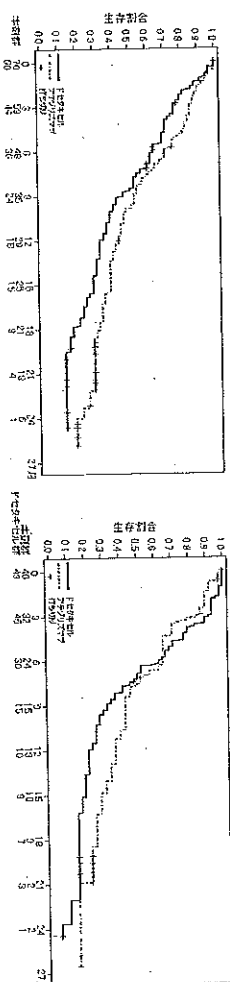


図5 扁平上皮癌患者集団におけるPD-L1発現状況別のOSのKaplan-Meier曲線 (OAK試験)
(左図: TC1/2/3又はIC1/2/3の患者集団, 右図: TC0かつIC0の患者集団)

②国際共同第III相試験 (IMpower150試験) に組み入れられた患者のうち、PD-L1発現率に関する情報が得られた一部の患者のデータに基づき、PD-L1発現率等別に探索的に解析を行った有効性及び安全性の結果は以下のとおりであった。

有効性について、PD-L1の発現状況別の有効性の結果は、表3のとおりであった。なお、PD-L1の発現状況によらず、本剤の安全性プロファイルは同様であった。

表3 腫瘍組織検体におけるPD-L1の発現状況別の有効性 (OS, ITT-WT 集団)
(IMpower150試験, 2018年1月22日データカットオフ)

PD-L1 (検1)	投与群	例数	中央値 [95%CI] (カ月)	OS ハザード比* [95%CI]	交互作用の p値
TC0かつIC0	B群	167	17.1 [13.5, 20.4]	0.82 [0.62, 1.08]	0.7283
	C群	172	14.1 [12.9, 16.3]		
TC1/2/3又はIC1/2/3	B群	192	22.5 [18.2, 26.1]	0.77 [0.58, 1.04]	0.8585
	C群	165	16.4 [11.2, 22.9]		
TC0/1かつIC0/1	B群	230	19.1 [15.8, 23.8]	0.77 [0.60, 0.99]	0.8585
	C群	221	14.3 [13.3, 16.4]		
TC2/3又はIC2/3	B群	129	22.2 [17.0, 26.1]	0.82 [0.58, 1.17]	0.4630
	C群	116	16.7 [10.5, 24.2]		
TC0/1/2かつIC0/1/2	B群	288	18.2 [16.1, 21.0]	0.81 [0.65, 1.02]	0.4630
	C群	272	14.4 [13.3, 16.7]		
TC3又はIC3	B群	71	25.2 [18.7, NE]	0.70 [0.43, 1.13]	0.4630
	C群	65	15.0 [9.8, NE]		

*: 非腫瘍組織検体

【安全性】

① 国際共同第Ⅲ相試験 (OAK 試験)

有害事象は本剤群の 573/609 例 (94.1%)、ドセタキセル群の 555/578 例 (96.0%) に認められ、治療との因果関係が否定できない有害事象は本剤群 390/609 例 (64.0%)、ドセタキセル群 496/578 例 (85.8%) に認められた。発現率が 5%以上の因果関係が否定できない有害事象は表 4 のとおりであった。

表 4 発現率が 5%以上の因果関係が否定できない有害事象 (OAK 試験) (安全性解析対象集団)

器官別大分類 (SOC: System Organ Class) 基本部 (PT: Preferred Term) (MedDRA ver.19.0)	本剤群 (609 例)		
	全 Grade 例数 (%)	Grade 3-4 例数 (%)	Grade 5 例数 (%)
因果関係が否定できない全有害事象	390 (64.0)	90 (14.8)	0
一般・全身障害および投与部位の障害	202 (33.2)	15 (2.5)	0
疲労	87 (14.3)	8 (1.3)	0
無力症	51 (8.4)	2 (0.3)	0
発熱	49 (8.0)	0	0
胃腸障害	136 (22.3)	6 (1.0)	0
悪心	53 (8.7)	2 (0.3)	0
下痢	47 (7.7)	3 (0.5)	0
皮膚および皮下組織障害	119 (19.5)	8 (1.3)	0
発疹	42 (6.9)	2 (0.3)	0
そう痒症	38 (6.2)	2 (0.3)	0
代謝および栄養障害	86 (14.1)	9 (1.5)	0
全数減退	52 (8.5)	0	0

なお、本剤群において間質性肺炎 10 例 (1.6%)、肝機能障害 43 例 (7.1%)、大腸炎・重度の下痢 5 例 (0.8%)、1 型糖尿病 1 例 (0.2%)、甲狀腺機能障害 27 例 (4.4%)、副腎機能障害 1 例 (0.2%)、下垂体機能障害 1 例 (0.2%)、神経障害 (ギラン・バレー症候群等を含む) 11 例 (1.8%)、肺炎・髄膜炎 5 例 (0.8%)、infusion reaction 8 例 (1.3%)、筋炎・横紋筋融解症 2 例 (0.3%)、腎機能障害 (尿管管間質性腎炎等) 5 例 (0.8%) 及び重度の皮膚障害 9 例 (1.5%) が認められた。また、肺炎、溶血性貧血、重症筋無力症、心筋炎及び免疫性血小板減少性紫斑病は認められなかった。本副作用発現状況は関連事象 (臨床検査値異常を含む) を含む集計結果を示す。

② 国際共同第Ⅲ相試験 (IMpower150 試験)

有害事象は本剤併用群 B 群の 386/393 例 (98.2%)、対照群 C 群の 390/394 例 (99.0%) に認められ、治療との因果関係が否定できない有害事象は本剤併用群 B 群 370/393 例 (94.1%)、対照群 C 群の 377/394 例 (95.7%) に認められた。本剤併用群 B 群において本剤との因果関係が否定できない有害事象は 286/393 例 (72.8%) に認められ、発現率が 5%以上の本剤との因果関係が否定できない有害事象は表 5 のとおりであった。

表 5 発現率が 5%以上の本剤との因果関係が否定できない有害事象 (IMpower150 試験) (安全性解析対象集団)

器官別大分類 (SOC: System Organ Class) 基本部 (PT: Preferred Term) (MedDRA ver.20.1)	B 群 (393 例)		
	全 Grade 例数 (%)	Grade 3-4 例数 (%)	Grade 5 例数 (%)
本剤との因果関係が否定できない全有害事象	286 (72.8)	104 (26.5)	5 (1.3)
本剤との因果関係が否定できない全有害事象	141 (35.9)	25 (6.4)	1 (0.3)
胃腸障害	65 (16.5)	10 (2.5)	0
下痢	53 (13.5)	8 (2.0)	0
悪心	28 (7.1)	0	0
嘔吐	26 (6.6)	3 (0.8)	0
口内炎	21 (5.3)	2 (0.5)	0
一般・全身障害および投与部位の障害	141 (35.9)	14 (3.6)	0
疲労	64 (16.3)	7 (1.8)	0
無力症	38 (9.7)	4 (1.0)	0
皮膚および皮下組織障害	129 (32.8)	10 (2.5)	0
発疹	50 (12.7)	5 (1.3)	0
そう痒症	35 (8.9)	1 (0.3)	0
脱毛症	20 (5.1)	0	0
臨床検査	73 (18.6)	26 (6.6)	0
ALP 増加	20 (5.1)	5 (1.3)	0
代謝および栄養障害	70 (17.8)	13 (3.3)	0
食料摂取	41 (10.4)	6 (1.5)	0
筋骨格系および結合組織障害	69 (17.6)	3 (0.8)	0
関節炎	57 (14.5)	20 (5.1)	1 (0.3)
血液およびリンパ系障害	34 (8.7)	8 (2.0)	0
貧血	56 (14.2)	4 (1.0)	0
内分泌障害	39 (9.9)	1 (0.3)	0
甲狀腺機能低下症			

なお、本剤併用群 B 群において間質性肺炎 13 例 (3.3%)、肝機能障害 32 例 (8.1%)、大腸炎・重度の下痢 18 例 (4.6%)、肺炎 3 例 (0.8%)、甲狀腺機能障害 60 例 (15.3%)、副腎機能障害 2 例 (0.5%)、下垂体機能障害 3 例 (0.8%)、神経障害 (ギラン・バレー症候群等を含む) 20 例 (5.1%)、肺炎・髄膜炎 1 例 (0.3%)、infusion reaction 13 例 (3.3%)、筋炎・横紋筋融解症 1 例 (0.3%)、腎機能障害 (尿管管間質性腎炎等) 11 例 (2.8%)、重度の皮膚障害 10 例 (2.5%) 及び発熱性好中球減少症 11 例 (2.8%) が認められた。また、1 型糖尿病、重症筋無力症、心筋炎、溶血性貧血及び免疫性血小板減少性紫斑病は認められなかった。本副作用発現状況は関連事象 (臨床検査値異常を含む) を含む集計結果を示す。

日本人患者集団における有害事象は本剤併用群 B 群の 363/366 例 (100%)、対照群 C 群の 24/24 例 (100%) に認められ、治療との因果関係が否定できない有害事象は本剤併用群 B 群 363/366 例 (100%)、対照群 C 群の 24/24 例 (100%) に認められた。本剤併用群 B 群において本剤との因果関係が否定できない有害事象は 353/366 例 (97.2%) に認めら

れ、発現率が10%以上の本剤との因果関係が否定できない有害事象は表6のとおりであった。

表6 日本人患者集団において発現率が10%以上の本剤との因果関係が否定できない有害事象

器官別大分類 (SOC: System Organ Class) (MedDRA ver.20.1)	B群 (36例)		
	全Grade 例数 (%)	Grade 3-4 例数 (%)	Grade 5 例数 (%)
本剤との因果関係が否定できない全有害事象	35 (97.2)	16 (44.4)	1 (2.8)
胃腸障害	20 (55.6)	3 (8.3)	0
便秘	9 (25.0)	0	0
悪心	9 (25.0)	2 (5.6)	0
口内炎	6 (16.7)	1 (2.8)	0
嘔吐	4 (11.1)	0	0
皮膚および皮下組織障害	20 (55.6)	2 (5.6)	0
発疹	11 (30.6)	2 (5.6)	0
一般・全身障害および投与部位の状態	18 (50.0)	0	0
倦怠感	14 (38.9)	0	0
発熱	7 (19.4)	0	0
臨床検査	11 (30.6)	6 (16.7)	0
好中球数減少	5 (13.9)	5 (13.9)	0
AST増加	4 (11.1)	0	0
ALT増加	4 (11.1)	0	0
代謝および栄養障害	16 (44.4)	5 (13.9)	0
食欲減退	9 (25.0)	3 (8.3)	0
内分泌障害	8 (22.2)	0	0
甲狀腺機能低下症	5 (13.9)	0	0
甲狀腺機能亢進症	4 (11.1)	0	0
血液およびリンパ系障害	7 (19.4)	3 (8.3)	0
血栓性血栓減少症	4 (11.1)	3 (8.3)	0
貧血	4 (11.1)	2 (5.6)	0

4. 施設について
化学療法剤のある患者に使用する場合には、承認条件として使用成績調査(全例調査)が課せられていることから、当該調査(全例調査)を適切に実施できる施設である必要がある。その上で、医薬品リスク管理計画(RMP)に基づき、本剤の医薬品安全性監視活動への協力体制がある施設であって、本剤の投与が適切な患者を診断・特定し、本剤の投与により重篤な副作用を発現した際に対応することが必要のため、以下の①～③のすべてを満たす施設において使用するべきである。

① 施設について

①-1 下記の(1)～(5)のいずれかに該当する施設であること。

- (1) 厚生労働大臣が指定するがん診療連携拠点病院等(都道府県がん診療連携拠点病院、地域がん診療連携拠点病院、地域がん診療病院など)(平成30年4月1日時点:437施設)
- (2) 特定機能病院(平成29年6月1日時点:85施設)
- (3) 都道府県知事が指定するがん診療連携指定病院(がん診療連携指定病院、がん診療連携協力病院、がん診療連携推進病院など)
- (4) 外来化学療法室を設置し、外来化学療法加算1又は外来化学療法加算2の施設基準に係る届出を行っている施設(平成28年7月1日時点:2540施設)
- (5) 抗悪性腫瘍処方管理加算の施設基準に係る届出を行っている施設(平成28年7月1日時点:1290施設)

①-2 肺癌の化学療法及び副作用発現時の対応に十分な知識と経験を持つ医師(下表のいずれかに該当する医師)が、当該診療科の本剤に関する治療の責任者として配置されていること。

表

- 医師免許取得後2年の初期研修を修了した後に5年以上のがん治療の臨床研修を行っていること。うち、2年以上は、がん薬物療法を主とした臨床腫瘍学の研修を行っていること。 - 医師免許取得後2年の初期研修を修了した後に4年以上の臨床経験を有していること。うち、3年以上は、肺癌のがん薬物療法を含む呼吸器病学の臨床研修を行っていること。
--

② 院内の医薬品情報管理体制について

医薬品情報管理に従事する専任者が配置され、製薬企業からの情報窓口、有効性・安全性等薬学的情報の管理及び医師等に対する情報提供、有害事象が発生した場合の報告業務、等が速やかに行われる体制が整っていること。

③ 副作用への対応について

③-1 施設体制に関する要件

間質性肺炎患者等の重篤な副作用が発生した際に、24時間診療体制の下、当該施設又は連携施設において、発現した副作用に応じて入院管理及びCT等の副作用の鑑別に必要な検査の結果が当日中に得られ、直ちに対応可能な体制が整っていること。

③-2 医療従事者による有害事象対応に関する要件

がん診療に携わる専門的な知識及び技能を有する医療従事者が副作用モニタリングを含めた苦痛のスクリーニングを行い主治医と情報を共有できるチーム医療体制が整備されていること。なお、整備体制について、がん患者とその家族に十分に周知されていること。

③-3 副作用の診断や対応に関して

副作用（間質性肺炎、肝機能障害、大腸炎・重度の下痢、肺炎、1型糖尿病、内分泌障害（甲状腺機能障害、副腎機能障害、下垂体機能障害）、神経障害（ギラン・バレー症候群を含む）、重症筋無力症、脳炎・髄膜炎、infusion reaction、筋炎・横紋筋融解症、腎機能障害（尿管管間質性腎炎等）、重度の皮膚障害、心筋炎、溶血性貧血、免疫性血小板減少性紫斑病、発熱生好中球減少症（カルボプラチン、パクリタキセル及びビベンズブゾ（遺伝子組換え）との併用投与時）等）に対して、当該施設又は近隣医療機関の専門性を有する医師と連携し（副作用の診断や対応に関して指導及び支援を受けられる条件にあること）、直ちに適切な処置ができる体制が整っていること。

5. 投与対象となる患者

【有効性に関する事項】

① 本剤の単剤投与は下記の患者において有効性が示されている。

- ・ プラチナ製剤を含む化学療法歴を有する切除不能なⅢB期/Ⅳ期又は再発の非小細胞肺癌患者（EGFR遺伝子変異又はALK融合遺伝子陽性の患者ではそれぞれEGFRチロシンキナーゼ阻害剤又はALKチロシンキナーゼ阻害剤の治療歴も有する患者）

② 本剤の他の抗悪性腫瘍剤との併用投与は下記の患者において有効性が示されている。

- ・ カルボプラチン、パクリタキセル及びビベンズブゾ（遺伝子組換え）との併用投与：化学療法歴のない扁平上皮癌を除く切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌（ただし、EGFR遺伝子変異又はALK融合遺伝子陽性の患者は除く）患者
- ③ 下記に該当する非小細胞肺癌患者に対する本剤の投与及び使用方法については、本剤の有効性が確立されておらず、本剤の投与対象とならない。
 - ・ 術後患者に対する本剤の単独投与及び他の抗悪性腫瘍剤との併用投与
 - ・ 化学療法歴のある患者に対する本剤と他の抗悪性腫瘍剤との併用投与
 - ・ 化学療法歴のない扁平上皮癌患者に対する本剤の単独投与及び他の抗悪性腫瘍剤との併用投与
 - ・ 化学療法歴のない非扁平上皮癌患者に対する本剤の単独投与及び②で本剤の有効性が示されていない他の抗悪性腫瘍剤との併用投与

④ 本剤は国際共同第Ⅲ相試験（OAK試験）において、全体集団においてドセタキセル群に対して優越性が検証されている。ただし、扁平上皮癌の患者では、TC0かつIC0群（腫瘍組織におけるPD-L1を発現した腫瘍細胞及び腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合がいずれも1%未満）において、ドセタキセル群と比較した際の効果の大きさが小さい傾向が認められていることから、化学療法歴のある扁平上皮癌の患者においてはPD-L1発現率も確認した上で本剤の投与可否の判断をすることが望ましい。PD-L1発現率がTC0かつIC0であることが確認された患者においては、本剤以外の治療選択も考慮する。

なお、ベムプロリスブゾ（遺伝子組換え）のコンパニオン診断薬（販売名：PD-L1 IHC22C3 pharmDX「ダコ」）によりPD-L1発現率（注：ベムプロリスブゾ（遺伝子組換え）のコンパニオン診断薬では腫瘍組織におけるPD-L1を発現した腫瘍細胞が占める割合のみで判定される）を確認した扁平上皮癌の患者であって、本剤の診断薬（販売名：ベムプロリスブゾPD-L1（SP142）による再検査が困難な場合には、以

下の文献等を参考に本剤の投与の可否を検討できる。

文献等)

・ Gadgeel S et al. Ann Oncol 2017; 28(suppl 5): Abstr 12960

【安全性に関する事項】

- ① 下記に該当する患者については本剤の投与が禁忌とされていることから、投与を行わないこと。
- ・ 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

- ② 治療前の評価において下記に該当する患者については、本剤の投与は推奨されないが、他の治療選択肢がない場合に限り、慎重に本剤を使用することを考慮できる。

- ・ 間質性肺疾患の合併又はその既往のある患者
- ・ 胸部画像検査で間質影を認める患者及び活動性の放射線肺炎や感染性肺炎等の肺に炎症性変化がみられる患者
- ・ 自己免疫疾患のある患者又は慢性的若しくは再発性の自己免疫疾患の既往歴のある患者
- ・ ECOG Performance Status 3-4 (※2) の患者

※2 ECOG の Performance Status (PS)

Score	
0	全く問題なく活動できる。起床前と同じ日常生活が制限なく行える。
1	肉体的に激しい活動は制限されるが、歩行可能で、軽作業や座っての作業は行うことができる。 例：軽い家事、事務作業
2	歩行可能で自分の身の回りのことはすべて可能だが作業はできない。日中の50%以上はベッド外で過ごす。
3	限られた自分の身の回りのことしかできない。日中の50%以上をベッド内横状態で過ごす。
4	全く動けない。自分の身の回りのことは全くできない。完全にベッド横状態で過ごす。

6. 投与に際して留意すべき事項

- ① 添付文書等に加え、製造販売業者が提供する資料等に基づき本剤の特性及び適正使用のために必要な情報を十分に理解してから使用すること。
- ② 治療開始に先立ち、患者又はその家族に有効性及び危険性を十分説明し、同意を得てから投与すること。
- ③ 化学療法薬を有する切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌患者においては腫瘍組織におけるPD-L1を発現した腫瘍細胞及び腫瘍浸潤免疫細胞が占める割合も確認した上で本剤の投与可否を判断することが望ましいが、それらが確認できない場合には、本剤の使用の適否を適切に判断した上で投与すること。
- ④ 主な副作用のマネジメントについて

- ・ 間質性肺疾患があらわれることがあるので、本剤の投与にあたっては、臨床症状（呼吸困難、咳嗽、発熱等）の確認及び胸部X線検査の実施等、観察を十分に行うこと。また、必要に応じて胸部CT、血清マーカー等の検査を実施すること。

- ・ 本剤の投与は重度の infusion reaction に備えて緊急時に十分な対応のできる準備を行った上で開始し、本剤投与中及び本剤投与終了後はバイタルサインを測定する等、患者の状態を十分に観察すること。なお、infusion reactionを発現した場合には、全ての徴候及び症状が完全に回復するまで患者を十分観察すること。

- ・ 甲状腺機能障害があらわれることがあるので、本剤の投与開始前及び投与期間中は定期的に甲状腺機能検査（TSH、遊離T3、遊離T4等の測定）を実施すること。

- ・ 本剤の投与により、過度の免疫反応に起因すると考えられる様々な疾患や病態があらわれることがある。異常が認められた場合には、発現した事象に応じた専門的な知識と経験を持つ医師と連携して適切な鑑別診断を行い、過度の免疫反応による副作用が疑われる場合には、本剤の休薬又は中止、及び副腎皮質ホルモン剤の投与等を考慮すること。なお、副腎皮質ホルモン剤の投与により副作用の改善が認められない場合には、副腎皮質ホルモン剤以外の免疫抑制剤の追加も考慮する。

- ・ 投与終了後、数週間から数か月経過してから副作用が発現することがあるため、本剤の投与終了後にも副作用の発現に十分に注意する。
- ・ 1型糖尿病があらわれ、糖尿病性ケトアシドーシスに至ることがあるので、口渇、悪心、嘔吐等の症状の発現や血糖値の上昇に十分注意すること。1型糖尿病が疑われた場合には投与を中止し、インスリン製剤の投与等の適切な処置を行うこと。

- ⑤ OAK 試験では投与開始から 36 週まで、Ivpower150 試験では投与開始から 48 週までは 6 週間間隔、それ以降はいずれの試験も 9 週間間隔で有効性の評価を行っていることを参考に、本剤投与中は定期的に画像検査で効果の確認を行うこと。